

302泣き笑い劇場 (第 2 報) ー遊び心を持った楽しいクラス運営ー

林 俊治 (愛知)・鎌田 穰 (大阪)

要旨

キーワード :

1 : はじめに

「アドレリアン第 10 巻第 1 号 (通巻第 20 号)」に第 1 報として、林がおこなったクラス運営の 1 学期の経過を報告しました。このクラス運営の特徴は、どのようにしたら問題を除去できるか、という問題除去的アプローチではなく、いかにしたら楽しいクラスを構成できるか、という解決構成的アプローチ (鎌田, 1995) をとったことです。

アドラー心理学にもとづくクラス運営は、「クラスはよみがえる (野田・萩, 1989)」で示されているように、クラスを構成する生徒と教師のひとりひとりがクラスへの所属感をもち、自ら積極的に運営に参加する、という協力原理にもとづくクラス運営です。

しかしながら、現実のアドラー心理学的クラス運営をみても、なかなかそうはなっていない場合が多いようです。その多くは、アドラー心理学が提示する技術のみを使用して、問題を引き起こした個々の生徒に関わり、教師主導でトラブルを除去していくといった、旧来の問題除去的アプローチによる運営か、あるいは、生徒にすべてをまかせるという建て前で、生徒が何をしても放任的になっているアナーキーな運営になっています。

このような中で、筆者らは、担任が協力原理にもとづくクラス運営を実現するためには、アドラー心理学の基本とされる解決構成的アプローチをとることが最も重要だと考えました。そこで、「遊び心をもった楽しいクラス」を具体的な解決目標として設定しました。その理由は、協力原理にもとづくクラス運営には、所属する生徒のひとりひとりが「このクラスの一員でよかった」という所属感をもちることが重要で、そのためには、クラスに楽しい雰囲気を作り上げることが必要不可欠だ、と考えたからです。

このような目標に従い、1 学期間運営した結果、教師と生徒のみならず、生徒どうしても信頼関係が深まりました。しかし一方で、林が主導的に関わったため、生徒からの自主的な参加が少ない運営になったことも観察されました。以下、302 の後半の運営を林が報告し、1 年間のクラス運営について考察を加えます。また、本稿とは別に、「遊び心をもった楽しいクラス運営」について、総論を書き改めます。なお、本稿におけるレポート番号は、前号からの通し番号です。

2：後半の記録

【レポート5】ちょっとやばかった体育大会応援コンクール

体育大会に応援コンクールがあります。クラスがいろいろ工夫して応援し、競い合うのです。クラスの団結を高めるためにとても大切な行事である、という前提のもとにおこなわれます。しかし、実際にはそうでもありません。禁止事項が多く、何かがんじがらめでやっているという感じですが。しかしそのような中でも、我々の学校の生徒たちは、ルール違反の減点も覚悟の上で、実際の応援をやってしまいます、特に3年生は、最後の応援ということで気合いが入っており、ルール違反覚悟で応援します（ルール違反といっても、私にはすばらしい応援に見えるのですが…）。しかし、去年は審査項目や基準があいまいだったので、決められているルール上では失格であるはずのクラスが、なんと優勝してしまいました、そのことでもめることはなく、やったものの勝ちのコンクールでした。

今年は、私がコンクールの担当でした。生徒執行部会（生徒会の役員8名で構成）で、どうするかを話し合い、ルールはなるべく必要最低限のものにしようということになりました。職員会議でも認められ、生徒議会で提案されました。「ルールは2つです。鳴り物は使わない。立体物は作らない。理由は、近所の迷惑になるからです（このルールは、全校生徒で話し合われたわけではなく、ある程度これくらいのルールがないと、職員会議で認めてもらえないだろうというものでした）。生徒議会議では、何の異議もなく認められました。学級応援が、ある程度クラスに任せられたわけです。しかし、T先生とこんな会話もありました。

T 「林先生、ルールが少なすぎませんか。」

林 「枠を決めたくなかったんです。決められた枠の中でやるよりもクラスにまかせたほうがいいと思ったんです。」

T 「枠を決めておかないと何をやっていいのか分かんないかもしれندしょ。」

林 「もし枠を決めてなくて失敗したら、それはそれで…。失敗から学ぶこともあるかもしれませんよ。」

T 「最初から失敗するって分かっているのに禁止しないのは、どうかと思う。」

林 「でも、職員会議で認められていますし、今年はこれでやってみたいのです。どうかよろしくお願いします。」

当日は、どのクラスもすばらしい応援をしていました。ものすごく派手できれいで、踊りなども上手で、あとかたづけもきれいにできて、とてもすてきなコンクールだったと思いました。

302も感動の応援でした。なぜ感動だったのかというと、次のような経過があったからです。まず、応援コンクールについて、クラス会議をしました。応援コンクールの目標は、「みんなで楽しい応援コンクールにしよう」に決定され、クラスを中心とする学級応援団も、男3人・女4人計7人が選出されました。学級応援団が考えた応援は、テープレコーダーを使って音楽を流し、それにあわせて学級応援団が踊り、他のみんなは後ろでそれを盛り上げる、というものでした。

応援団 「先生、テープレコーダー使っていいですか？」

林 「う～ん、どうかな、テープレコーダーは鳴り物にはいるかな？」（このとき、テープ？いいじゃん、楽しそうで、なんて思っていました）

応援団 「そうですよね。でもテープを使うととても楽しくできるから、使いたいんです。」

林 「失格になったらどうする？（心の中では失格になったら責任とることになるよって思っていました）」

応援団 「鳴り物っていうのは笛とかでしょ、テープレコーダーを使っただって近所には迷惑にはならないと思うし、使いますね。」

林 「そうか…。」

このときの鳴り物の規定をはっきりしておかなかったことと、私のいいかげんな態度が、後でクラスの全員に迷惑をかけることになってしまったのです。応援方法が決まり、学級応援団は踊りを一生懸命者え、毎日近くの公園（芝生があってとてもいい公園）で曲を流し、踊りの練習をしていました。教室で練習しないのは、下校時間が決められており、十分に練習できないからです。私も、差し入れなどを持って練習を見に行きました。「先生、ここまで完成したからちょっと見てよ」と言われ、踊りの練習を見学しました。息がぴったり合い、楽しくて、すばらしい、おもしろい踊りでした。練習の後、差し入れのジュースを生徒と飲みながら、沈んでいく夕日を見ました。実はこのとき、「ほんとにテープレコーダー使っていいかな。まあいいか。こんなに一生懸命にやってるんだからこのままでいいや。なんか青春ドラマみたいだな」と思っていました。

体育大会まで後3日というところで、担任の先生同士で学級応援のことが話題になりました。なんと1年生と2年生は、テープレコーダーを学年の先生の判断で禁止していたのです。3年生は禁止していませんでした。その話を聞いた3年生の先生は、「3年生だけ使うのはまずいな。テープレコーダーを使っているクラスを説得してやめさせよう」と言い出しました。その話を聞きながら、「これはやばいことになってきたぞ。クラスみんなになんて言えばいいんだ…。あのとき、テープレコーダーを使わないでって言えばよかった…。テープレコーダーは鳴り物に入れないとかルールに入れておけばよかった…。ものすごくいいかげんなこと言っちゃったな…」と、ものすごく後悔しました。

テープレコーダーを使って応援を計画していたのは、302の他に2クラスありました、この2クラスは、担任の先生の説得でなんとかテープレコーダーを使わない応援でいくことになりました、そして残ったのは、うちのクラスだけになってしまったのです。どうしようかとずいぶん悩み、考え、どうしようもなくなったので、学級応援団に相談しました、「私がいいかげんなことを言ったので、みんなに迷惑をかけてしまいました。鳴り物はいけない、というルールのところで、1・2年生はテープレコーダーを使わないように指導したそうです。3年生は禁止してなかったんですが、1・2年生の話を聞いて、3年生だけ特別に使う、というのもいけないから、3年生もテープレコーダーを使わないようにクラスを説得しようということになったんです。ごめんなさい。」このときほんとに申し訳なくて、つくづく私はいいいかげんな人間だと思いました。「私はみんなを説得なんてできませんし、したくないんです。けれども、このままテープレコーダーを使えば、きっとルール違反で減点の対象になり、優勝はできないでしょう。そこで、どうすればいいか考えたんですけど、ウォークマンを応援団がつけてテープレコーダーなしで踊るか、みんなで大きな声を出して歌って踊るか、このまま失格覚悟でやるか、なんていう案しか私には浮かんでできません。」そんなおしつけがましい私の話を聞いて、学級応援団の女の子が、「そうか、でももうテープレコーダーを使わないで応援することはできないよ。先生、失格になってもいいよ。私たちは楽しい応援がしたい…」と申し出てきました。

私のいいかげんな態度によって、クラスの全員に迷惑をかけてしまったにもかかわらず、私に愚痴をまったく言わずに、失格になってもいいから楽しい応援がしたい、と言ってくれたことに對して、涙が出るほどうれしい思いがしました。私は、私の責任をきちんと果たしたのか、私に

できることは学級応援団の生徒に相談することだけでなく、3年生の先生にテープレコーダーを使えるように話し合うことではなかったのか、と自問自答し、それらをできなかった自分にとでもがっかりしました。学級応援団の生徒たちに勇気づけられたというか、救われました。その夜、家に帰り、妻に相談すると、「それは他の先生が怒るよ。あなたはいいけど、クラスの子がかわいそうだよ。できたら先に一言先生たちに謝っておかないと」と言われ、「う～ん、その通り。鋭い意見。あしたクラスみんなに相談しよう」と、思いました。

体育大会の2日前に、クラス会議を開きました。「応援コンクールですが、みなさんに相談したいことがあります。実は、テープレコーダーの使用が禁止になってしまったんです。ごめんなさい。私が、応援団の人にとってもいいかげんなことを言っていたんです。でも応援団の人たちは、とても一生懸命、毎日暗くなるまで練習していました。それなのに、いまさらテープレコーダーを使わないなんてことを私が言うなんて、とんでもないことです。それに、いまさら使わないで応援することは不可能なんです。ウォークマンを使うか、テープレコーダーの代わりにみんなで大きな声で歌うか、失格覚悟でやるか、という私の案に対して、応援団のみんなはテープレコーダーなしで踊りたくない、たとえ優勝できなくても、失格になっても、このまま楽しく応援したい、と言っています。みんなはどう思いますか?」「…。」生徒たちは、「えーっ!」という様子で黙っていました。「このままテープレコーダーを使っていけば、たぶん失格になると思います。このままテープレコーダーを使っていいかな?失格になっても、クラスで楽しい応援にすることでいいかな…。」このとき私は、いやだと言われたらどうしよう、と緊張していました。「……。」生徒たちは、困った様子で黙っていました。

私は苦し紛れに、「Hさん、どう思いますか?」と尋ねました。Hさんはちょっと困りながら、「…私は応援団の…人にまかせます。せっかく練習したんだから…。もし失格になっても…みんなが楽しんでできればいいです。」私は、「なんというすばらしい意見だあ!」と感激しながら、「A君は? どう思う?」と聞きました。「おれもテープを使うのでいい!」なんと、A君も賛成してくれました。「ほかのみんなは? どう思いますか?」ほとんどの生徒がうなずいていました。

私は、何ともいえない感謝の気持ちでいっぱいになりながら、次のように言いました。「わかりました。それでは、テープを使って楽しく応援しよう!あと、もうひとつ聞いて欲しいことがあるんだけど、テープレコーダーをこのまま使えば、他の先生や生徒は怒ると思うんだ。私が何か言われるのは、私のいいかげんな態度のせいだからかまわないんですけど、テープレコーダーを使って応援して、他のクラスの子に302のみんなが、なんで使ったんだって言われるのは、まずいと思うんです。だから使うにあたって、全先生・全校生徒にあらかじめ謝ったほうがいいと思うんだけど、どう思う?考えたんだけど、謝罪文を書いて、全先生・全校生徒に先に謝っておきたいと思うんです。もちろん、これは私が書きます。これを全先生に配って、全校生徒に伝えてもらおうと思ってます。了解していただけますか? すいません。」全員うなずいていました。

クラス会議が終わり、応援団の女の子が私にこう言ってきました。「先生、私たちも謝罪文を書くよ」と…。それから私と学級応援団は、教室で相談しながら謝罪文を書き上げました。次の日、私と生徒たちは、2種類の謝罪文を職員室で配りました。配った瞬間、私たちは職員室から逃げました。やっぱり怒られるのが恐かったので…。しかし、他の先生たちの反応は何もなく、何一つ言われず、302の学級応援は予定通り行われました。結果はすばらしい応援だと思ったのですが、減点され、優勝はできませんでした。

この学級応援コンクールでの出来事は、私のいいかげんな態度によって引き起こされました。私自身、自分のいいかげんさに気づいていながら、あらゆる責任をクラスのみんなに押しつけてしまったと思います。「私にできることは何か」と考え、それを実行に移すにはとても勇気がいるんだ、ということを生徒たちに教えてもらいました。でも、私の失敗から引き起こったことな

のですが、「失敗してよかったな。なんかクラスがひとつになったな」などと、他人には言えないことを心の中で思った、302の応援コンクールでした…。

【レポート6】授業がうるさい！クラス会議2時間大バトル！

302は授業中騒がしいと言われていました。これは、前半の【レポート2】のところで、教科担任の先生から指摘され続けてきたことです。1学期に私は、教科担任の先生の指摘に惑わされ、302の生徒を無視して、授業を静かにさせる動きを一方的にしてしまいました。課題の分離をすることで、そのことに気づいてからは、しばらく騒がしいことについては放っておこうと決心しました。

ところが、2学期も終わりに近づいたころ、ついに対教師暴力未遂事件が起こってしまいました。Y先生は302の授業のうるささに、いつも怒っていました。特に、わがクラスのK君（例のヤンキーのK君）とY先生は以前から折り合いが悪く、Y先生はK君の対応に困った様子でした。その日も302の授業は騒がしく、Y先生は注意していました。しかし、まったく静かにならず、しかも折り合いの悪いK君が一番騒がしくしていました。

ついに、我慢の限界だったのでしょうか、Y先生はK君を直接注意しました。すると、突然K君がY先生につかみかかったのです。私は日頃から、授業のない空き時間は、土間にいるか、廊下をうろうろしてひなたぼっこをしており、その間に、エスケープしている生徒の相手をしたり、職員室でできない話を同僚の先生としたり、本を読んだりしています。ちょうどこの時も、私は廊下をうろうろしていました。ところが、この一件については、まったく気がつきませんでした。

この話を後から聞いた瞬間、これはチャンスだと思いました。「問題が起こったときは、みんなと仲良くなるチャンス！」と、鎌田先生から聞いていたからです。さてどうしたものかと思いながら、この日、帰りの会に行くと、Hさんが私にぼそっと言いました。「先生、こりゃクラス会議だよ。」このひとことを聞いて、「チャンス！ またまたチャンス。そうだよ、これはクラスの問題としてみんなで話し合おう！」と考えました。すぐにみんなに提案しました。「今日、Y先生とK君がもめたそうですね、なんでそうなっちゃったんだろうね…。あまりに授業が騒がしかったのではないだろうか？ さっき、クラスの子から、クラス会議をやった方がいい、と言われました。私も同感です、このことについてクラス会議を開きたいのですが、どうですか？ いいですか？」生徒たちは、しょうがないよな、というような顔をしていました。「やってもいいよ」と、半ば強引にクラス会議を開くことにしました。次の日の帰り、「昨日の話の続きだけど、クラス会議を進めやすくするために、ちょっと提案があります。それは、たぶん私たちがこれからどうするか、ということなんだ。私たち教師は、ちゃんとみんなに分かるように授業をするのが仕事だし、みんなもきっと楽しく授業を受けたいんじゃないかな、と思うんです。けど、いろいろ都合もあるし、うまくいかないこともあるよね。だから、先生もみんなも授業に楽しく参加するためにどうすればいいか、という話し合いをしたいんです。どうかな？ でね、また、ない頭でちょっと考えたんだけど、どうすればいいかという案を3つ思いついたんだ。だけど、これは私の案であって、他にも案があったら、教えて欲しいんです。案というのは、

1. うるさいから席替えする
2. このままいくと困るから黙る
3. このままいく

の3つなんです。どう思う？ なんか他の意見ある…？」生徒たちは黙っています。「じゃあ、今

から紙を配るから、3つのうちどれを選ぶか、さらに他に案がある人は書いてくれませんか？」とその日は終わりました。

次の日、全員の意見をまとめ、生徒に配りました。まとめると、1を選んだ人は7名、2は28名、3は2名でした。その他はなし。1を選んだ人の主な意見は、「うるさい人どうしがくっついていてからどれもだめだと思うけど、どれかっていうと1で、多少静かになる。」2を選んだ人の意見は、「黙ろうと思えばできる。みんなの迷惑にならないように、みんながクラスのことを思えば、みんなが過ごしやすい授業にすることは簡単。協力すればすむこと。」3の意見は、「それほど気にならない」というものでした。そして、まとめの最後に、次のような私の意見を書き添えました。“302の授業の目標を、私は「一人一人が安心して、気楽に楽しく授業に参加できること」だと考えています。それで授業がわかればもっといいし、わかんなくても教え合うことができればいいなあと思います。”

行事予定表を見ると、しばらくクラス会議を開けるような時間は取れませんでした。そこで、教科の時間をもらうことにしました。次の日の3・4限がちょうど私の授業がないので、3限の英語の時間をもらうことにしました。「クラス会議をしたいのでください」と言うのはだめだろうと思い、「実はあまりにも授業がうるさいので、クラスみんなで話し合いたいと思います。でも学級活動の時間がとれないので、英語の時間にしたいのですが、どうでしょうか？」と英語の先生にお願いしました。英語の先生は、すぐにOKしてくれました。「授業が静かになるなら、こんないいことはない」ということで。

次の日の朝。「クラス会議のことですが、3限の英語の貴重な時間をいただけることになりました。クラス会議は3限に行います。」そして、3限がやってきました。

「それでは、今からクラス会議を行いたいと思います。議題は、みんなはどんな授業にしたいかということなんですが、これはやっぱり、クラスみんなが安心して楽しく授業に取り組める、ということですよね。確認しておきます。」「うんうん」とうなずく生徒が多かったので、ここでも強引に「じゃあ今日は、みんなが安心して楽しく授業に取り組むためにはどうすればいいか、話し合いましょう」と言いました。

「アンケートには、たくさんの意見をありがとう。これをもとに会議を進めていきますが、何か意見のある人は？」何も意見が出なかったので、最初に私が、議長であるにもかかわらず（本来は、議長を生徒にやってもらいたかったのですが、私にやってほしいということになり、引き受けました）、こう提案しました。

林：あの、ルールをつくりませんか。必要最低限のルールを。

N君：罰を与えよう。

林：罰？どんなの。

N君：罰金とか。

林：うーん、罰はつくりたくないな。もし、お金払えって言われたら、いやだもんね。

I君：うるさかったら、すぐに席替えをする。

林：席替えをして静かになるかな？

I君：…。

林：こういうのはどうかな、うるさい人は教室の外に出て行ってもらう。それで、もうちゃんと静かに授業が受けれるなって思ったら、また教室に戻ってくる。

全員：えーっ！

Mさん：誰がうるさいっていうの。

林：うーん、みんなでお互いに。

Mさん：えっ！ そんなことできないよ。

林：じゃあ、教科担任の先生に言うておく。このクラスでは、うるさい生徒を指差すと廊下へ出て行きますって。

Mさん：廊下なんか出たくない。

Wさん：特別席をつくるっていうのは？例えばうるさかったら、特別つくった席に行ってもらおう。

林：黒板の前とか？

Wさん：そう。

林：みんなどう思う

N君他：席替えやればいい！

その後、ああでもないこうでもない、私（議長）と生徒たちとの話し合いは続きました。そして終わりのチャイム…。

林：時間がなくなりました。どうしましょうか？

I君：先生、次の時間もやる！ 次の時間ももらってきて。

林：へっ？ 次の時間は授業だよ。（そのとき、次は問題のY先生の授業だと気づき）そうか、じゃあこうしよう。Y先生にお願いしてみます。そしてY先生が来たら、授業。私が来たらクラス会議。それでいいですか。

全員：いい！

職員室に行って、Y先生にそのことを言うと、Y先生はすぐにOKしてくれました。「よっしゃ」と教室へ行くと、「やったあ！」とクラスの生徒は大喜び。そこで、これまでの意見をまとめました。「ルールをつくる、それも罰にならない、罰を与える。席替えする。」

この後、意見は出ずに、生徒たち、とくに男子の集中力が切れてきました。「先生、もうこんなめんどくさいことやめて、席替えすればいいじゃん。」「席替え！」と、しだいに、男子はふざけてきました。そのとき、Kさんに意見を求めると、「クラスみんなはちゃんと話し合っていないよ、これじゃあね。」と鋭い意見。いっぺんにシーンとなり、真剣な雰囲気になりました。

私は、「多数決はとりたくない、けれども時間も無い、いったいどうしよう」と考えながら、いろんな生徒に意見を求めました。そして、Bさんに意見を求めたとき、「私は、ルールなんて必要ないと思う。だって、今こうしてクラスみんなはきちんと静かに話し合っているから。みんなやればできる。だからルールなんて必要ないと思う。」この意見を聞いて、みんな納得。困っていた私は、感激で涙が出そうになりました。「そうだよな。そのとおりだよな。ルールなんて必要ないよな。なんて素晴らしい意見だろう…。」2時間にわたるクラス会議大バトルの結論は、「やればできる！」だったので。

私は、クラス会議の前に、クラスにルールをつくらうと考えていました。なぜなら、「この事件は、対教師暴力未遂なんだ。ちょっとやばい。こういうときはルールをつくらなきゃ」と考えたからです。けれども結論は、「ルールなんていらぬ。私たちはやればできる」だったので。またひとつ、生徒から学びました。SMILE（野田監修）にもあるように、ルールを決めるときには、「全員で決める」「合理的なルールを作る」「特権階級がない」ということが大切だ、ということを生徒たちから教えてもらいました。ただ、いつまで私が議長をしなければならないのだろう、と思いつつ…。

【レポート7】お弁当持ってクラスでエスケープ！？

この年は、学校は校舎を新しく建て直していました。運動場にプレハブを建てているので、運動場がありません。昼放課も外で遊ぶことはできません。ある天気の良い日に、ふと「何でこんなに天気がいいのに、ずっと教室にいるんだろっ」と思い、弁当を持って近くの公園（芝生があってとても素敵です）に行くことをクラスに提案しました、ほとんど大賛成でしたが、「先生、そんなことしていいの？ 見つかったらどうする？」という声もありました。「見つからなければいい！」ということで、学校中には内緒で決行することになりました。

決行する日の昼、「よし、今から行くぞ！私は先に行っているから、みんな見つからないように来い！」「そんな、見つかったらどうするの？」「見つかった人が責任とる…」このような無茶苦茶なことを言いながら、公園へ弁当持ってエスケープしました。その日はとても空が青く、暖かい日でした。芝生にすわり、お弁当を全員で食べ、そのあとみんなで遊びました。ドッチボールとかいろいろ…。心の中では、「ああ、きっと他のクラスは校舎で弁当食べているんだな」と思いつつ、多少不安も感じていました。

昼放課が終わって、私とみんなはダッシュで学校へ戻りました。後で分かったのですが、2、3人の女の子が学年主任の先生に見つかっていたようです。しかし、他の先生たちは何も言いませんでした。むしろ、次の日私が弁当を持って職員室を出ようとすると、「今日はどちらへ行くんですか？」などと、笑いながら言われてしまいました。このとき、心の中で、3年生のおおらかな先生たちに、大いに感謝しました。

卒業式間近の最後の学級活動、他のクラスは教室で先生の話でしたが、302は、またまた弁当を持って、ダッシュで公園へ行きました。今回は教務主任の先生に、「今日302は近くの公園へ行きます」と、ひとこと言って許可をもらったので、堂々と手を振って行きました。弁当を食べたり、遊んだり、全員で写真を写したり、楽しい学級活動でした。

【レポート8】黒ひげ危機一髪で生活委員になったK君のその後

4月の最初に彼に会ったとき、彼はとても教師を嫌っているようでした。近寄って話そうとすると目つきが変わり、「おれは先生を信頼しとらんでよ！」ときっぱり言われてしまいました。「そうかあ、彼はめっちゃんこ先生のことが嫌いなんだなあ。どうしよう？まあ、そんなことには注目しないでおこう」と思うしかありませんでした。

彼は、授業に出ずに、土間（下駄箱がおいてあるところ）にいつもいました。そこで何をしているかという、他の友達が土間にいれば話をしたり、いなければただボーっとしていたり、煙草を吸ったり（これはいつも）、昼飯を食べたり（靴が臭くないのかな？）、昼寝をしたり（何でそんな臭いところで寝れるのか？）していました。

そんな彼に対して、とにかく仲よくなることを目標に接しました。実際には、勉強や学校の話をしてないように、世間話を毎日するようにしました。それで、ときどき「煙草はここで吸わないでくれえ」と言って、どいてくれたら「ありがとう」、吸い殻を捨ててくれたら「ありがとう」と言っていました。他には、「授業もおもしろいよ」「クラスみんなといっしょにご飯食べるの美味しいよ」などを言ってました。そうしながらも、「彼のことはまあいいか。不適切な部分には注目しないでおこう。それより、“みんなが楽しく生活する教室”を創るほうがおもしろいし、楽しいや」と考えて、通常は、彼への個人的な対応よりもクラス運営の方にエネルギーを注いでいました。

土間での生活は最後まで続きましたが、卒業式間近のある日、彼は赤ラン（真っ赤な短ラン・

真っ赤なボンタン) でやってきました。その朝、彼は土間の隅で、モジモジ恥ずかしそうにしています。私は最初、「どうしようかな。注目しないでおこかな」と考えたのですが、「やっぱり、赤ランなんて一生に何度も見れるもんじゃないから、注目しよう！」と考え直しました。そこでモジモジしているK君に、「うわあ～、赤い学ランだ！すごい！ こんな学ランを見れてうれしい！ いっしょに写真撮ろうな。この写真をみんなに見せたらびっくりするよな。あんたの担任でよかった！ せっかく着てきたんだから、クラスに行って、みんなに見せようよ。みんなびっくりするぜ」と声をかけました。するとK君は、「いいよ…」と恥ずかしがっていました。「赤ランのこと、みんなに言っている？ その上着かして」と聞くと、「いいよ…」との返事でした。

そこで、走ってクラスへ行き、朝の会で、「今日はみんなに重大な発表があります。」クラスは静まりました。「今日、K君が赤ランを着てきました」と言うと、「うおー！」と歓声。「最初ね、ディスコの店員みたいだなんて思ったんですが、やっぱりすごい。すごすぎる。みんなで写真撮るといいぞ！ そんで卒業して新しい友達に見せたら、みんなびっくりするぜ。これがその赤ランです！」「うおー！」「着てみたい人！」男の子が着ると、「V6 みたい！」「SMAP か！」と、ものすごく盛り上がりました。その後、K君が教室にやって来たとき、彼らは赤ランをさわったり、いろいろな質問をしました。赤ランを着に、みんなでわいわい盛り上がったわけです。

彼は、その赤ランを卒業式に着てきたでしょうか？ 答えは NO です。「卒業式！ いいかい、式には着てこないでくれる」と私はお願いしました。すると彼は、卒業式の時には黒の学生服を着て、卒業式が終わった後、すぐに着替えて、在校生から見送られるときに、バッチリ着てきました。彼は、私のメンツも立ててくれながら、堂々と、在校生が見送る中、赤ランを着て卒業していきました。

【レポート9】学年を仕切るK子さん

K子さんは、1年生のときクラスの室長をやっていました。私が勤務する学校には伝統があり、学年を仕切る子（いわゆるヤンキー）が必ずいます。そしてこのヤンキーは、上級生から下級生に受け継がれていくのです。K子さんも最初そのような気はなかったとは思いますが、なにぶん目立ちたがり屋だったので、上級生から目をつけられました。2年生になると、彼女は1つ先輩のO子さんの妹分（妹分になるとその学年を仕切ることができます。上級生の後ろだてができたのですから）になりました。それから彼女の行動は変わり、平気で授業を妨害したり、授業エスケープするようになりました。その時の学年の先生は、彼女を説得し、なんとか普通の生活に戻そうと一生懸命でした。しかし、彼女の態度はますます大きくなっていきました。

彼女の背後には、ぴったり上級生がついていたのです。

彼女は、私が顧問するバスケット部に所属していました。彼女がまだ2年生で、3年生が引退したころ、彼女が部活に来るようになりました。最初に体育館にやってきたとき、彼女はとても気まずそうでした。私は何と言おうか迷いました。「久しぶりだね。ちゃんと部活に来てくれてありがとう。（あれ、“うれしいよ” だっけ？）」

彼女はその言葉にびっくりしていたようでした。

3年生になっても、彼女の行動はあまり変わりませんでした。あいかわらず、授業には出ませんでした。それでも私は、彼女の行動に口を出しませんでした。ただ、教育相談のときには、今の行動を続けているとどうなるか、いっしょに考えるようにしました。彼女はどうなるかちゃんと分かっていました。

5月頃、シンナーの吸引が公園で発覚して、授業後、彼女と話をしました。

林：シンナーを吸っていたの？

K子：うん。

林：どうする？

K子：親には黙っておいてほしい。

林：そうか、シンナーは体に悪いってことは知ってる？

K子：……。

林：シンナーは脂肪を溶かしてしまうんだよ。歯、神経、肝臓とかをね。だから、もうやめたほうがいいよ。

K子：やめるよ。だから、親には黙っておいて。

林：そうか、分かった。

彼女はニコニコして帰っていきました。しかし、6月になり、またシンナーを吸ってしまいました。

林：また、吸ったの。

K子：ごめんなさい。

林：吸ってしまったものは仕方ないから、これからどうするか、いっしょに考えようよ。今回のことは、学年の先生もみんな知っているんだ。だから、親に黙っていることはできないと思うよ。先生から親に話してもいい？

K子：黙っててほしい…、

林：気持ちは分かるんだけど、あなたがシンナーをやめることが一番大切なことだと思う。(しばらく、沈黙が続く)

K子：自分で電話する…。

林：へ？

彼女はそう言って、母親へシンナーを吸ったことを電話で話しました。

林：自分で話すなんて！ 勇気があるね。ちゃんと自分で言ってくれて、ありがとう。

K子：お母さんに、お父さんには内緒にしといてって言うておいた。お母さんなら分かってくれるから。(お父さんはものすごくきびしい人なんです。それにしても、何と、かしこい！)

その後も、彼女のシンナーは続きました。警察に補導され、迎えにも行きました。シンナーを吸うたび、行き帰りにお母さんが付き添うことになったり、髪を切られたりしました。けれども、そのたびに「またやっちゃった」と言いながら、彼女は私に話をしてくれました。

【レポート10】先生、お風呂につかっているみたいだよ

「授業がうるさい」という事件のあと、いったいクラスはどうなったのでしょうか。結論からいうと、教科担任の先生が不思議がるくらい、授業に集中するようになってしまったのです。もちろん、受験が近づいてきたということもありますが…、

席替えの方はあいかわらず、エキサイティングでした。3学期になると、ビンゴゲームで出た数字の書いてある席へ座ることになりました。1ヶ月に1度の席替えが、卒業間近には毎日になってしまいました。

さらに、卒業式間近、Wさんが、「先生、机を隣同士全部くっつけてしまいましたか」と提案してきたのです。「はあ？」私は、「それってなんかすごい変だぞ。そんな男女入り乱れて、全部机くっつけるなんて…」と思ったのですが、一応クラスのみんなに提案したら、みんなは大賛成！次の日から、教室の真ん中に 39 個の机が縦横全部くっついて、男女が仲よくおひなさまのように並んで座りました。机と机の間はあいていません。ぴったりくっついているんです、それも全員！！その後、Hさんは、「先生、このビンゴで男女関係なく席を決め、みんなが隣同士くっついてると、今まで以上にみんなのことが分かっていい」と言っていました、

私は、「こんな席にしたら、授業がうるさくなってしまうのではないか」「きっと教科担任の先生が文句言ってくるだろうな」と、また余分な心配をしました。あるとき国語の先生から、「林先生、2組の席おもしろいね。みんな前の席より、静かですごく集中して聞いているよ」と予想外の一言。また、他のクラスの先生も、「いいなあ、あの席…。うちのクラスでもやりたかったな」とまたまた予想外。他のクラスの生徒も、「いいなあこの席。でも、どうしてみんなちゃんとすわっているんだろう？」と疑問の声。「あいつの隣はいやだなあ」「ぎょえー」という最初のころの声が、「隣同士くっついているのがいい」と変化していったのです。最初は机をくっつけるのにほぼ全員が反対していたのに、最後には全員でくっついて、楽しそうに授業を受けているのを見て、とてもうれしい気持ちと、生徒たちに感謝する気持ちでいっぱいになりました。

ある女の子の1年間の感想の中に、「先生、この席いいね。お風呂につかっているみたいだよ」と書いてありました。

最初はどうなることかと思った席替えです。しかし、教師にとってはあまり大切とも思わない（自分が学生のころはとても大切だった!?) 席替えを、クラス会議を通して、生徒たちといっしょに遊びながらおこなうことで、私も生徒も貴重な体験ができたと思います。しかし、教師生活 10 年、あんな席は見たことない…。

【レポート11】涙の卒業式・・・

卒業式の最中から涙が出てきました。座っている生徒の顔を見ながら、「明日からいっしょに生活できないのか…」とと思っているうちに、涙が出てきたのです。生徒の前で泣くのは、ちょっと抵抗がありました。また、「こんなことだと最後に私が話すとき、みんなの前で泣いてしまうぞ」と思いながら、教室へ向かいました。まず、私から一人ずつ教室で卒業証書を渡しました。そのとき保護者も教室にいるので、ひとりひとりに一言ずつ言葉をかけました。保護者の方は、証書を渡すところを写真に撮ったり、ビデオに撮ったりしていました。その後、担任から最後の話をするのですが、今年は少し工夫しようと思い、あらかじめクラスで作った文集の最後に、生徒には内緒で担任の話を印刷し、ひとりひとりにメッセージを書いておきました。

文集を配り、「これ、みんなの文集です。よかったら、後でじっくり読んでください。これから最後の話をします。文集の最後のページを開いてください」と言って、それをゆっくり読み始めました。読み進んでいるうちに、「おっ…泣けてこない…これは調子がいいぞ。この分だと泣かなくてすむかも」などと、結構冷静な自分に気づきました。しかし、あと4行、「みんなと明日から会えないと思うと、さみしいです…」というところを読み始めた瞬間、堰をきったように涙が出てきたのです。その後は、何回読み返しても言葉になりませんでした。そのうちに、あたりはすすり泣く声でいっぱいになりました。それを聞いて、また涙があふれてきました。生徒たちとおおい泣いていると、後ろで見守っていたお母さんから、「がんばれ！」という声がとんできました。私は、「タイム！」と言って後ろを向き、涙を何とかこらえてから最後の4行にもう一度挑戦しました。しかし、最後まで声にはならず、何も言えないまま、涙とともに彼らと別

れてしまいました。

最後のお別れのとき、女の子が泣きながら一言、「先生楽しかったよ…」と言って、私に抱きついてきました。さすがにこのときは、天にも昇るような気持になり、「アドラーやっててよかったな」と、つくづく思いました。

【302から私へのメッセージ】 アンケートと感想からの抜粋

このアンケートを書いてもらうときには、“ゴースト ニューヨークの幻”という映画の主題歌や“スタンドバイミー”を流し、ちょっとムードを出しました。

★私の言葉で傷ついたのは？

- 先生が話しているときに、私が友達としゃべっていたら、私だけ注意した。それも、前の席なのに、みんなに聞こえるように言われたこと。
- 高校の話をしているとき、自分の希望をしているところは「やばいぞ」とはっきり言ってくれたとき。
- 言葉じゃなくて、態度だな。「そっけない」ところ。高校のこととか、いっぱい一生懸命聞いているのに、なんかはっきり答えてくれんところとか。

★私の言葉で勇気づけられたのは？

- 個表と進路希望調査を出すのを遅れたとき、「個表、持ってきてね」と言ってくれたとき、隠さず親に見せようと思った。
- 学級通信の最後の言葉に、いつも「ああ、そっか」と思う。感動している。
- 「あなたはだいじょうぶ」と力強くなく言ってもらった。何だかずっと林先生の声が耳の中に残っている。
- 学級通信の最後の詩がいい。勇気とかじゃないけど、見ててなんか納得。
- 「やれば、できる！」という言葉。

★生徒として思ったこと感じたことを教えてください。

- いろいろ手間かけるのが好きですね。でもやりたいようにやっていていいと思います。楽しいのが一番ですね。受験ムードじゃない302はホッとします。
- 少しボーっとして頼りないところもあるけど、そこがまたいいところのひとつだよ。
- 学級応援のテープの話の時、なんか昔の熱血先生みたいでよかった。洋画の「今を生きる」みたいな。見たことある？ ないならこんど見てね！
- あなたはとてもいい先生だと思う。私も親も認めています。ただ、先生の性格は今もよくわからんなあ…。
- 先生のような方はめずらしいと思います。302 になってよかったと思う。林先生のような考えをもっている人もいるんだということがわかったから。
- 先生は他の先生と違って自由でいろんなことやっていい先生だと思う。
- よく歌を歌っているから、いやなことなんてないんだろうなあと思う。他のクラスといるんなところがちがって楽しい。このクラスでよかったと思う。
- もう、この先きっと林先生みたいな先生にはめぐりあえないだろう。林先生のこと、ずっと忘れないだろう。
- 何でもお遊びにになってしまうあなた。とってもステキ！ 来年もヨロシク。

★ 1年間の感想

- このクラスはすごくすごく楽しくて、つくづく私はこのクラスでよかったなあって思ったよ。たくさんの人に自慢できるクラスだと思う。
- はじめは全然仲がいい人いなくて、すごく寂しくていやだった。でもすぐ友達がいっぱいできて本当に楽しかった。みんなとずっと一緒に授業を受けたり、遊んだり、話してたりしたい。一年間ありがとう。
- もう超楽しかったぞ。スッゲーいろんな子がいて、3年間でもっとも楽しかった！本当に。2年生まではなかなか友達にうちあけることができないこととかもあったけど3年のみんな（302のみんな）はとても信頼できたぞ！ Thank you だ。林先生にもお世話になった。でもって3年の担任は林先生で本当によかった！私も mother も father もそう言ってマスヨ。
- こんなにいいクラス、もう二度とつくれないだろうね。もうお別れだと思うととってもさみしいね。一生忘れない。一生忘れない。みんなありがとうね。はじめ不安だったけど、今「不安」なんて思うこと一回もないよ。先生ありがとう。先生のおかげで中学3年生、めちゃくちゃ心に残る思い出になった。同窓会楽しみ。先生、同窓会は、大高緑地でやる？ ありがとう。またどこかで会いましょう。
- 林先生と遊ぶと、はじめは“先生、またくだらん遊びを…”って思うんだ。けどねー、そー思っても、いっしょに遊んでみるとね、いつもいつもだんだんおもしろくなっていくんだよね。フシギだと思うんだけど、でもそこが、先生の魔術なんだと思ったりするのダ。先生ありがとうね。
- 始業式の時、このクラスの名簿を見たとき、内心すごくショックだった。仲のいい子が全然いなかったし、2年の時の仲のよい子はみんな一緒にひとりだけ違ってたから、この1年間どうなるんだろうって思った。はじめのうちは、このクラスに慣れなくて本当に悩んだ。だけど、日がたつにつれてだんだんみんなと慣れて今ようになった。みんなで大高緑地に行ったときは、みんなと交流できて楽しかった。せつかくみんなと仲良くすることができたのに、あと5日でお別れなんてさびしすぎる。みんな本当に本当にありがとう。
- 小学校のクラスみたい。4年2組ぐらい。ビンゴとかいろいろ遊ぶからというわけじゃなくて、なんだか楽しかった。自然にふれあう機会が多くてうれしかった。今の席のかたちは、「ぬるいおフロ」に入っている気分で気持ちがいいです。「3年のときのクラスは楽しかった」といえるのはうれしい、うれしい。ただ、もうちょっと林先生の意見をちゃんとしてほしかったな。
- いろんなことを教えてもらったな。先生は遊びの天才だな。あのときのインチキな手品もおもしろかった。先生は困ったときにいろんな人に相談するでしょ。私の今まで出会ってきた先生たちは、困ったそぶりなんて見せなかったし、どこかいつも境界線みたいなものがあって、先生っていう人は好きになれなかった。でも林先生って生徒といっしょ。みんなに相談するし、みんなのやりたくないことはやらないし。友達みたいだ。ときどきたよりないところもあるけど、それでいいな。先生が四角い箱にキチッとおさまって、物の考え方の狭い人だったら、今も先生っていう人がハンパでなくきらいでした。だから林先生は私の中で生徒と先生の境界を破った人なんだ！

3：考察

【この1年を振り返って考えること】

なんとか1年が終わりました。ほんとに楽しい1年でした。

“遊び心を持った楽しいクラス運営”ということで、1年間生徒たちと生活してきました。振り返れば、私自身が楽しみ、それにみんなを巻き込み、さらに私も彼らの中に巻き込まれた、という感じです。私がやってきたことを整理すると、

- 1) いろいろなおもちゃをクラスに持ち込みました。おかげで机の中はおもちゃだらけ。とにかく、東急ハンズやらトイザラスやらおもちゃ屋さんによく通った。
- 2) とにかく、クラスに問題が起こったら、生徒たちに相談しました。授業がうるさいときも、エスケープの子を迎えに行くときも、何もかも。ときどき「先生のいやみっらしい口調がいやだ」とか「超むかつく」というようなことも言われましたが、言われるとすぐにクラスの子に相談し、次の日全員に「昨日こう言われたんだけど、私もそう思うので直します」と言い続けました。
- 3) クラスの全員を楽しいことに誘いました。弁当を持ってエスケープとか、公園へ遊びに行くとか、クリスマス会とか、学級の時間に何にもやることがない時はすぐに手品とか。この手品はいいですよ。ものすごく盛り上がります。おかげで“先生”ではなく“サギ師”とか“大道芸人”とか呼ばれたこともありました。

とにかく、何もかも楽しもう、大げさに楽しもうと心がけた1年だったと思います。卒業を控えた3年生ということで、生徒の気持ちが高揚することがあったと思うのですが、アンケートや感想を見ると、感激することばかりで、いろいろな遊びによってクラスに与えた影響はものすごく大きかったように感じます。

私は、教師になってから10年になるのですが、この年は、アドラー心理学を始めた昨年よりもさらに発見したことがたくさんあります。これまでなら、私は、始業前・放課・放課後は職員室や廊下にいたのですが、この年はいつも302の教室にいました。子供たちの感想にもありましたが、302の教室は本当にのんびりしていたのです。私の居場所が、職員室よりも302の教室にあったのです。302の教室は、私にとってとても居心地のいい場所でした。冬の寒い朝ははやく教室に行き、ストーブをつけて、生徒たちとおじさんとおばさんになって井戸端会議をしていました。放課になるとふらっと教室に行き、ぼーっとしてると、「なんだ、先生いたの？」と、いつも言われました。教室はこのように居心地のいいところなのだ、ということを実感しました。

今ひとつの大きな発見は、アンケートから得られました。私が全然意識していないところで、生徒たちは勇気づけられ、また傷つけられていたのです。アンケートを家に持って帰り、妻に見せると、「あなたのことをほんとによく見てるね。このそっけないところなんか私もそう思う。あんた知らないでしょ」などと言われて、「そうか…」と深くうなずくことが多々ありました。

この1年で、「遊び心」というのは本当に大切だ、と実感しました。今では、この「遊び心」が私自身のエネルギーになっているとさえいってもいいでしょう。私にとって、アドラー心理学は「遊び心」なしには考えられません。本当に、この1年はからだでアドラー心理学を学ぶことができたと思っています。

心の底から302の全員に感謝感謝！！

【次年度も遊び心を忘れずに】

私のクラス運営における次年度のテーマも、やはり“遊び心”です！まわりの先生には、私がおこなったこの1年間のクラス運営は、相当変で迷惑なことだったと思います（こればかりはアンケートがとれないので、何ともいえませんが）。そのような中で、私が特にうれしかったこと

は、まわりの先生方が何一つ私に文句を言ってこなかったことです（私がしていたことは、おそらく全員知っていると思うのですが…）。

来年度もこのように、「ああしよう、こうしよう」と思うことはあるのですが、できる限り考えないようにしたいと思います。「遊び心」を基本にして、そこからクラスに生じてくるいろいろな出来事を、生徒たちと一緒に体験していきたいと思います。次年度はどのような子供たちに会うかと思うと多少不安ですが、それ以上にとっても楽しみです。次の年もおもちや屋さん足繁く通い、もっと生徒を驚かせるものを買わなくては！

4：2学期にもちこされた課題の成果

1学期のおわりに、クラス会議に生徒が積極的に参加できるよう、いかに生徒を勇気づけるか、という課題を残しつつ、2学期以降も、林はさらに「遊び心」をもってクラス運営に取り組みました。その結果、クラス会議は活発化し、むしろそれを通して、教師および生徒は1学期以上に仲よくなりました。ここでは、クラス会議の活発化について、鎌田が考察します。なお、「遊び心をもった楽しいクラス運営」の総論は、本稿とは別に書き改めていますので、そちらもご参照いただければ幸いです。

会議が活発化したのは、(1)ひとりひとりの意見をアンケートとして集め、(2)それにもとづき林がディスカッションの方向を作り、(3)生徒の意見をよく聴き、(4)クラスの決議に従っていった結果だといえます。

まず林は、生徒が意見を出しやすいように、モデルとなる提案をおこない、それにたいするアンケートをとり、同時に生徒個人の意見を記述してもらいました、会議が不活発な状態では、アンケートで意見を集めることによって、ひとりひとりの意見に触れることができます。そして、その結果を集計し、生徒に直接フィードバックすることで、生徒の参加意識が高まるものと考えます。

次に、林はディスカッションの方向として、「クラスのみんが安心して楽しく授業に取り組むためにはどうしたらいいか」を提示しました。これは解決構成的な議題設定であり、旧来の問題除去的な議題設定とは異なります。問題除去的なアプローチでクラス会議をおこなうと、「授業がうるさい」を議題にあげ、どうしたらうるさくしないで授業ができるか、に焦点を当ててみましょう。そうすると、多くの場合、さまざまな規制と禁止の方向にディスカッションを進めていくこととなります。そうなっては、生徒どうしが罰しあうことになり、生徒が協働を学べないばかりか、むしろ生徒どうしの対立が生じてしまいます。これでは、クラス運営に有害な影響をもたらすでしょう。

302においても、議題の設定以後は、ルールや罰則を作るというような展開になりかけました。しかし、議題が「クラスのみんが安心して楽しく授業に取り組める」という解決構成的なものであったために、罰金や廊下に出るというルールが出ても、それらが議題に沿っていないとわかり、却下されたといえます。また一方で、解決像に向かう具体的な対処策が出にくかったことも事実でした。しかし、議論の結果は、「やればできる」という肯定的な結論になっているので、この議論を通してクラス内の信頼関係が深まったといえるでしょう。このような結論に至ったのは、やはり解決構成的な議題を設定したからだと考えます。

議論が活発化した今ひとつのきっかけは、会議において、林が生徒の意見をよく聴き、最終的にはクラスの決議に従ったことでしょう。教師が自分で意見を述べ、それを生徒に押しつけてい

ったり、生徒の意見を聴いたとしても、それを教師が自分の都合で修正して採用するのでは、生徒は、「どうせ意見を言っても取り上げてもらえないし、先生の意見が最後には通るにちがいない」というあきらめをもってしまいます。そうなっては、当然生徒は意見を述べる勇気を失っていくでしょう。林は逆に、自分が困ると生徒に聴き、生徒の意見に感動し、その意見を採用する、ということを繰り返しました。このように生徒の意見をよく聴き、最終的には林もクラスの決議に従うことが、最も生徒を勇気づけたといえます。

このように、2学期以後の課題となっていたディスカッション技術のトレーニングは、特におこなわれませんでした。常に林が生徒に意見を求め、かつクラスの決議を優先したことと、林からのモデル提示によって、クラス会議に生徒が積極的に参加するようになったといえます。

いまひとつ、クラス会議について特筆すべきことがあります。それは、クラス会議で生徒から提案され、議決されたことのほとんどが守られていた、ということです。授業がうるさくて開かれた会議の結論は、「やればできる」でした。ここに至ってからは、教師が不思議がるくらい静かな授業となりました。また、全員の席をひとつのかたまりのように結合させてしまう、という生徒からの奇抜な提案も、みごとに成功しており、クラス全体がさらに仲よくなるきっかけとなりました。もし、これらの提案を教師から出し、生徒に守らせようとしたならば、おそらく全ては反対の結果になったことでしょう。つまり、クラス会議に生徒が積極的に参加すればするほど、そこで議決されたことは遵守されやすくなる、ということです。これもアドラー心理学にもとづくクラス運営の特徴といえるものでしょう。

5：おわりに

以上、1年間の302のクラス運営を通して、アドラー心理学にもとづくクラス運営についてみてきました。そこでわかったことは、クラス内に協力関係を形成するためには、まずクラスを構成する教師と生徒のひとりひとりが、「このクラスの一員でよかった」という所属感をもち、信頼関係を深めることが重要だということです。そうやって初めて、ひとりひとりがクラス運営に積極的に参加し、協力するようになるのです。また、この所属感を形成するためには、クラス内での生活自体が楽しく、生き生きしたものになることがきわめて重要だと、理解できました。楽しく生き生きした学校生活が実現しない限り、「このクラスの一員でよかった」という感覚は生じてこないでしょう。そのために、「遊び心」はことのほか重要で、この「遊び心」なくしてアドラー心理学にもとづくクラス運営はできない、とさえいっても過言ではないでしょう。

以上から、アドラー心理学にもとづき、担任が協力関係形成を目指したクラス運営をおこなうためには、解決構成的に「協働 co-operation」という明確な目標を常に意識し、「遊び心をもった楽しいクラス」を具体的な解決像として、クラス全体に取り組むことが有効である、と結論づけることができます。

6：文献

- 林俊治・鎌田穰（1996）：302 泣き笑い劇場（第1報）－遊び心をもった楽しいクラス運営－，アドレリアン，10(1),12-21,日本アドラー心理学会
- 鎌田穰（1995）：過去の事例を振り返って－原因除去モデルから解決構成モデルへの変換－，アドレリアン，8(3),152-159

野田俊作・萩昌子（1989）：クラスはよみがえる，創元社

更新履歴

2012年9月1日 アドレリアン掲載号より転載